

私たちは体調を崩したらどのような行動をとるでしょうか。例えば、高熱が出たら病院で診察を受け、処方された薬を服用し、安静にします。大病を患った場合は、医師の診察を介し、必要があれば手術で患部を切除し、快癒或いは緩解を待ちます。すべての病が該当しなくても、現代の一般的な対処法といえるでしょう。

九州大学医学部名誉教授の故・池見西次郎氏は著書『自己分析―心身医学からみた人間形成』の中で次のように記しています。「私たちは、いつも、心身いずれの面にもかたよらず、いずれの心理療法の考えにもかたよらず、全人間的な広い立場から、教育や治療に当たるべきことを唱えている」

遡って、古代ギリシアの医学の大成者であるヒポクラテスは、数多く残した医学書の中で「心を別として身体を治そうとしてはならない」と後世に伝えていきます。

両者に共通するのは病を患った際、肉体のみならず心を診ることが必要と説いた点です。それは純粹倫理の学びにも通じます。

その教えを集約した『万人幸福の葉』には、「折角な病気を、ただそれだけとして直しては惜しい、勿体ない」(『葉』第七条)、なぜならば体が菌に侵されたり悪くなる原因は「心に不自然なひがみ、ゆがみが出来たことである」とあります。また、『葉』第六条には「子供自身に、あらわれた病気でさえも、例外なく、親の生活の不自然さが反映したまでである」とも書かれています。私たちが学ぶ純粹倫理は、多くの会員の



## 病の受け止め方を 改めて創始者の体験から学ぶ

実践体験によって、実証されてきました。決して偉い人が言ったからというよう上から目線のものでも、机上の空論でもありません。『葉』の著者である丸山敏雄も次のような体験をしました。

丸山敏雄の次男は三歳の頃に麻疹を発症しました。当時は、予防接種などなかったため、こうした病気は恐れられていました。両親は子供の病気を機に、夫婦で自身の不自然な心を見つめていきます。それは要約すると以下の内容です。

- ① 長男と年の離れた次男をかわいがりすぎ、気にかけてすぎたこと。
- ② 友人の子が麻疹を発症したと聞くと、過度の心配をしていたこと。
- ③ ことあるごとに感情を動かし、不足不満を抱く癖があったこと。

夫婦で相談し合い、ともに反省し、各々が心の転換を果たすことで、まもなく、次男の麻疹は完治しました。

こうした体験は医学的に証明することは難しいのかもしれませんが。

しかしながら、この体験は事実です。体験者は親子の不思議なつながりを知ることにより、子供に対しての向き合い方に変化が生じ、その過程が親子関係を強固なものにしていくのでしょうか。

信号機の赤という情報を無視すれば事故が起こります。病という赤信号も受け取り方次第では良き人間関係を涵養し、自己を磨くための素晴らしい情報といえるのです。(本文参考資料『純情に生きる』高橋徹著)